

## 石人形の頭はお尻？

野崎 隆夫 神奈川県環境科学センター

石人形といえば、水生昆虫を調べている人なら多くのかたがニンギョウトビケラの名の由来であることを知っていると思います。この石人形はお守りや郷土玩具として、山口県岩国市を流れる錦川の錦帯橋近くで売られています。岩国の文化として300年の歴史をもっているそうです。しかし、海外にはほとんど知られていなかったようで、昨年夏、スウェーデンで開かれた第7回国際トビケラシンポジウムの会場の一隅を北海道の伊藤富子さんとともに借りて、写真集や七福神などの民芸品を展示したところ、多くの参加者の関心をよびました。

ところで、この石人形は、ニンギョウトビケラの筒巢の両翼の大きめの石粒がさまざまな形をしていることから、それを人形の腕や腹部に見立てているのですが、それでは人形の頭は筒巢のどの部分を使っているのでしょうか？私は、ニンギョウトビケラが蛹化するとき入口を石粒で塞ぐことから、それを頭に見立てるのだと思っていました。ところが、実は、人形の頭は筒巢の末端を塞ぐ石粒だったのです。

石人形の材料は、主に大きな筒巢がたくさん採れる春から初夏にかけて集められます。この時期、川の中には幼虫および蛹とともに、成虫が羽化したあとの空の巣がたくさんあり、これらすべてが石人形の材料にされます。幼虫や空の巣には入口の蓋がありませんので、末端の石粒を頭に使うしかありませんし、入口に石粒のある蛹の巣でも末端を頭にすれば形が整うようです。これらの筒巢は1年に約10万個ほど採集されるそうですが、空の巣まで使うことが大量に採集されながら、このトビケラが300年も絶滅しなかった一つの理由かもしれません。

末筆ながら、本稿をみてくださった石人形作家、横田勲氏に感謝いたします。



写真1 石人形等の展示（ウメオ大学にて）

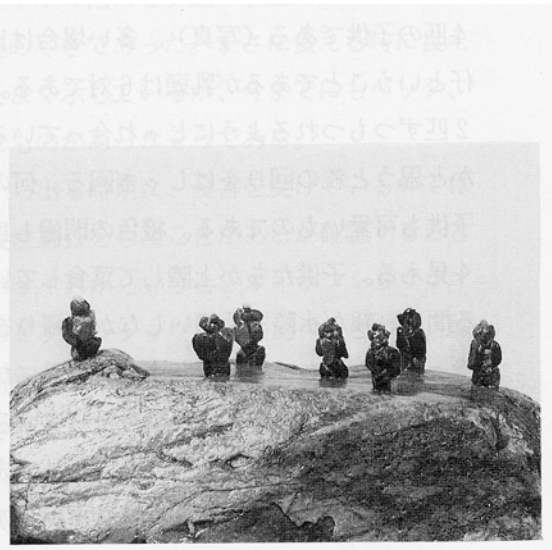


写真2 七福神